

イザヤ書12章2-3節 「救いの泉」

1A 神が救い 2

1B 「救い」の意味

1C 自分以上の存在

2C 神の怒りからの救い

1D 生まれながらの怒りの子(罪の性質)

2D 罪の支配の下(罪の力)

3C 交わりに入るための救い

2B 神以外の救い

1C 自分の力 (自己追求、自己改善、偽善)

2C 依存(薬物・酒、対人、お守り・教会)

3B キリストにある救い

1C 身代わりの死

2C 復活の力

4B 自分以外の力

1C 頼りにならない自分

2C 主が力

2A 救いの泉 3

1B 泉と貯水漕の違い

2B 救われた喜び

本文

私たちの聖書通読の学びは、9章の途中まで来ました。今日、午後礼拝で9章後半から12章まで読んでいきます。今朝は、12章2-3節に注目します。

2 見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。3 あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む。

私たちは前回、アハズ王が、イスラエルとシリヤから攻められそうになった時に、主なる神に拠り頼むことをせず、アッシリヤに頼ったところを読みました。神ではなく、それ以外のもの、肉の力に頼ったためにかえって、その災いがユダの国に広がったところを読みました。こうして、イスラエルとユダは異邦人の支配の中に入っていきます。しかし主が、独りの男の子をくださいます。その子が、「神が共におられる」という名、インマヌエルとなります。そこから救いが始まります。暗闇の中の一筋の光です。

1A 神が救い 2

そこで、彼らが自分で自分たちを救えないことを悟ります。終わりの日に、残りの民が神に拠り頼むことを主は予告されます。「10:20-21 その日になると、イスラエルの残りの者、ヤコブの家ののがれた者は、もう再び、自分を打つ者にたよらず、イスラエルの聖なる方、主に、まことをもって、たよる。残りの者、ヤコブの残りの者は、力ある神に立ち返る。」そして主は救いをお与えになります。主は、キリストによってこの地上に神の国を立てられることを約束してくださいました。この神の栄光に輝く国と、主の救いの幻を受けたイザヤ、また残された者たちが、神の救いをほめたたえているのが、12章です。「神は私の救い。」この短い文に、多くの福音の真理が含まれています。

1B 「救い」の意味

1C 自分以上の存在

教会に来ると、頻繁に飛び交っている言葉は、「救われている」という言葉ですね。まだ信仰を持っていない時に、「あなたは救われていますか」と尋ねられ、戸惑い、不快に感じたことがあるかもしれません。なぜ深いに感じるかと言いますと、それは自分が救われる必要を感じていないからです。自分は大丈夫だ、何かの助けや救いを必要としているような弱い存在ではない、と思っているからです。

けれども、自分以上の存在が必要なときを実感する時があります。重い病気に罹ったり、怪我をした時に、私たちはお医者さんの執刀の手に自分の身をゆだねなければいけません。水で溺れて死にそうな時に、その力果てた時に助けてくれる人に、全く頼らなければいけなくなります。そして命を助けてくれた人がいれば、その後の人生は、「私はこの人が救ってくれたおかげで、今の私がいます。」と証言することができますね。信仰者は、魂の救いがキリストのおかげだと告白している者たちです。「キリストが私を救ってくださったので、今の私がここにいます。」と証言しているのです。

2C 神の怒りからの救い

聖書は、人間は救われなければいけない、と教えています。何から救われなければいけないのか？「エペソ 2:1-3 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」私たちの救いは、「罪からの救い」または「罪から来る神の怒りからの救い」です。自分を造られた創造主に対して背を向けて、独立して生きている。自分勝手に生きている、その罪に対して、神は裁きを下さなければいけません。

神は聖い方であり、正しい方です。罪や不義に対して、そのままで良いというのは、これほど愛のない行為はありません。病の人に対して、「病のままでいいよね。」と言ったら、それは愛の

行為でしょうか？いいえ、あらゆる手を尽くしてその人を救おうとする、その病に体がどうやったら戦い、どのようなワクチンであればその悪いものを消滅することができるのかを必死に考えます。同じように、神は聖なる方、義なる神であり、私たちが罪の中に留まって、そのまま死に絶えることを望まない愛の方です。

したがって神は、罪に対して怒りをお持ちです。神は、その怒りを下す時を定めておられます。一つは、「終わりの日」と呼ばれる終末です。かつてソドムとゴモラという不道徳にまみれた町を滅ぼされ、また不義に満ちた世界を洪水によって滅ぼされました。終わりの日に、火によってこの地上に怒りを現わされます。もう一つは、死後です。自分が死んで、その後神は人を監獄に入れます。そして最後の審判の時に甦らせ、そこで地上で起こったことに従って、報いを決められます。そして、命の書物に名が書き記されていない者たちは、火と硫黄の池に投げ込まれ、苦しみを受けると書かれています。私たち人間は、今、自分の行なっていること、思っていることに対して、永遠の報いを受けるという責任ある存在として造られたのです。

1D. 生まれながらの怒りの子(罪の性質)

そこで今、読んだ箇所には、「生まれながら御怒りを受けるべき子ら」という言葉がありました。生まれた時から、神の怒りを受けるべきものがあるということです。そう、私たち人間は罪の性質をもって生まれました。幼い子供は、悪いことを親から教えてもらうことなく、することができます。親に、「嘘をつきなさい」と言われなくても嘘をつくことができます。親に、「これこれをしなさい」と言いつけられても、敢えてそれを行なわないということができます。なぜでしょうか？生まれながらに、神に逆らう罪の性質を持っているからです。

2D. 罪の支配の下(罪の力)

そしてもう一つ、「罪の中にあってこの世の流れに従い」という言葉があります。罪の中にいること、罪の力の下にいることです。自分がこのことはやってはいけないと分かっているにもかかわらず、それを行なっています。自分は自分のことは支配していると誰でも思っていますが、実はそうではなく、罪の力が自分を支配しているのです。タバコ、お酒、麻薬、何でも中毒や依存状態にある人は、「私はいつでも抜け出せる。この最後の一回だけで終わらせられる。」と言っています。したがって、罪の支配から抜け出していない、罪の奴隷になっています。神は、そこから私たちを救ってくださいます。罪を洗い清め、そして罪から解放して、罪から自由になる力を与えてくださいます。

ですから、救いは、罪と、罪に対する神の怒りからの救いです。生まれながらにして持っている罪を根こそぎ取り除いてくださる。そして、私たちを奴隷にしている罪の支配からの救い、解放してください。そして、罪に対する怒りから、神は私たちを救ってくださいます。「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。(ローマ 5:9)」

3C 交わりに入るための救い

では、私たち人間は救われて、その後にならぬのでしょうか？神の罪に対する怒りから、神ご自身が救ってくださることは分かりましたが、何のために救ってくださるのでしょうか？イスラエルを、神がエジプトから救い出された後に、神はシナイ山の麓に彼らを集め、こう言われました。「…あなたがたはすべての国々の民の中にあつて、わたしの宝となる。…あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。(出エジプト 19:5-6)」神ご自身の宝になる、ということです。つまり、女が一人の男の妻になるように、神との親しい交わりの中に入るということでもあります。「1コリント 1:9 神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。」救われた者たちは、絶えず主イエスのところに行き、この方から命の源泉を得て、日々を生き、そして永遠に生きています。

2B 神以外の救い

そこで本文に戻りますと、「神が私の救い」とあります。救いというのは、神が行うものです。ところが、多くの人が何とかして自分で自分を救おうとしています。「私が、私の救い」と根本的には告白しているのです。いかがでしょうか、ご自分にとって神が自分の救いとなっていますか、それとも自分が自分の救いとなっていますか？

1C 自分の力 (自己追求、自己改善、偽善)

多くの人は自分を追及して、救いを求めています。他者のために生きようとしている人さえ、そこには自己実現があります。被災地にボランティアに行く人々の中に、その多くが虚しさを感じます。他者のためであると言いながら、結局は自分探しをしているからです。医者になろうと目指している人が、他者を助けることによって何かを得ようと自分を追及していることを発見します。そして自己追求をしておらず、今の自分のしていることに無気力な人であっても、やはり自分というものから離れることができません。一日を、何となく過ごしていますが、そこには「自分が楽しく生きるにはどうすればよいだろう。」と、やはり自分を求めているのです。

そして、自分を直そうと努力している人々もいます。つまり自己改善をしようとしています。今日、流行している教えに、「積極的思考」というものがあります。物事を積極的に考えていこう、否定的に見られるものも積極的視点で見えていこうとするものです。これは、とても聞こえは良いものです。一般社会の中で、会社で、学校で取り入れられており、私たちの思考に深く浸透しています。けれども実は、とても疲れる作業です。なぜなら、自分はすでに疲れ果てているのです。それ以上、改善できないのに、その疲れた体を鞭打つように、自分の精神、魂に鞭打っています。もう一つ、「可能性思考」というものもあります。自分の内に潜在的にある可能性を発見して、それを引き出すというものです。これは、ある意味で危険であると言わざるを得ません。自分の内を探っていくことになり、その人はどんどん自己中心的になっていきます。自分のことばかり見ているので、他者が見えなくなっていくのです。ですから、自分を改善しようと思いがちですが、迷宮入りしてしまいます。

2C 依存(薬物・酒、対人、お守り・教会)

そして、自分ではないですが、その他のものに頼ろうとします。自分の弱いことは認めているのですが、けれども自分を捨てられないでいる人は、他のいろいろなものに頼ります。

それは、最近「依存」という言葉で表現されています。聖書的には、「偶像」と呼ぶことができるでしょう。ある人は、薬物やアルコールに頼ります。何か精神的に辛いことがあれば、お酒に走ってしまうというのは多くの方がすることです。そして薬物依存になる人々もいます。麻薬や覚醒剤だけでなく、薬に頼らないとやっていけないという人もいます。そして、対人依存もあります。その相手が夫や妻であったり、息子や娘であったり、あるいは友人や恋人かもしれません。そのようなことをしている時は、自分がその人のことを大切にしている、その人を助けたいと思いつつ、実はその人に自分自身がよりかかっている、自分の精神的、心理的必要性をみたしてもらいたいと思っています。そして宗教、いやもっとはっきり言えば、教会が自分の救いだと思っている人もいます。教会に来ているのだから、私は救いについて保証されていると思っています。

実は、他のものに頼っている時も、自分というものをしっかりと持っています。いや、自分というものを愛えたくないから、自分を捨てたくないから、そのプライド、高慢があるからこそ、他のものを利用して自分を救おうとしていると言えるのです。これを聖書では「偶像」と言います。まことの神以外のものに頼って、自分の欲求を満たそうとしているからです。

3B キリストにある救い

神を救いとすることは、とても勇気の要ることです。なぜなら、自分で自分を救えないということに認めることに他ならないからです。自分が主の前で惨めな存在であることを認めます。自分の可能性、自分のあり方、これらのものを一切捨てない限り、神を信じることはできません。そして神を信じるということは、すべての正しさ、すべての善、すべての力、すべての知恵は神にあることを知ることに他なりません。

宗教改革者マルチン・ルターは、カトリックの修道僧でした。彼は、弱く小さな人間である自分がミサを通して巨大な神の前に直接立っていることに、恐れすら覚えたそうです。それで、どれだけ熱心に修道生活を送り、祈りを捧げても心の平安が得られませんでした。イザヤ書には、「私たちの義は、不潔な着物のようです。(64:6)」とあります。どんなに自分が最高の正しさをもって神の前に出たとしても、完全な聖さと義の神の前では不潔な着物のようなのです。彼は神の前で自分が義であると確実に言えないことで苦しみ続けました。けれども、ローマ 1 章 17 節にある「義人は信仰によって生きる。」という言葉に出会いました。そこで突然光を受けたように、新しい理解が与えられました。ようやく心の平安を得たのです。人が何とかして良くなろうとする努力によってではなく、神が一方向的に人を義とみなしてくださるという、恵みによる義であることを発見しました。

彼が、「好きな詩篇は何ですか？」と尋ねられた時に、選んだものの一つが詩篇 130 篇でした。

1-4 節を読みます。「主よ。深い淵から、私はあなたを呼び求めます。主よ。私の声を聞いてください。私の願いの声に耳を傾けてください。主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう。しかし、あなたが赦して下さるからこそあなたは人に恐れられます。」この詩篇を記した人は、自分が深い淵にいることを想像しています。深く掘り下げられた、縦穴を想像してもよいでしょう。その下にいる人は、自分で這い上がることはできません。専ら、上にいる人が下に綱なり、何かを引き下ろしてくれることによってのみ上がることができます。同じように、不義の中にいる自分は、もっぱら神が自分を赦して下さらないかぎり、主の御前に出ることはできないと告白しています。しかし、それを神がしてくださいました。

1C 身代わりの死

自分で自分を救うことのできない私たちに、神が救いの御手を指し伸ばされました。「キリスト・イエスは罪人を救うためにこの世に来られた。(1テモテ 1:15)」ということです。自分は罪人、地獄に行くしかないと思った罪人のところに、イエス・キリストは降りてきてくださいました。主はニコデモにこう言われました。「だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。(ヨハネ 3:13)」天に上るといのは、自分で自分を救おうとすることです。けれども、それはできません。天から下ることはできます。イエス・キリストは神であられるのに人となられて、私たちが罪から救うために来られました。

キリストは、私の不義、その罪を十字架刑によって、我が身に置かれました。この方が私の身代わりに罪人とされました。そして、キリストは罪のない方でした。そのキリストの義が、私の身に置かれました。そして、罪の中で死んでいる私が、神の怒りを受けなければいけないのですが、キリストが身代わりに、その罪をご自分に負ったため、神の御怒りがこの方に注がれたのです。私が永遠に神から引き離されて、呪われた者にならなければいけなかったのに、イエス様が十字架の上で、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになられたのですか。」と、神の怒りをご自分の上に置かれたのです。「2コリント 5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。」

2C 復活の力

そして、神はイエスを死者の中から甦らせました。甦りのイエス様は、ご自分を信じ、心に受け入れた人々の内に住んでくださいます。ゆえに、私たちは生きることができます。自分自身はキリストと共に十字架につけられましたが、信仰によってキリストが私の内に生きてくださり、その復活の力で生きることができるようにしてくださいました。

4B 自分以外の力

1C 頼りにならない自分

そこで、「神が私の救い」と、高らかに誇ることができます。もはや、自分には頼ることはできません。大丈夫ではないのに、大丈夫だと偽り、欺く自分の心など信用することなどできません。

私の内、肉の内には何も良きものなど何一つないのです。

しかし今、神が救いとなってくださったという恵みがあります。「私は信頼して恐れることはない」とあります。主は真実な方です。主は完全な方です。その義も完全であり、裏切るような方ではありません。この方にあって私たちは安全です。その安心感があるので、恐れることはありません。恐れというのは、今の時代に人々の魂を殺す感情になっています。何か漠然とした恐れ、不安がある、その不安と恐れのために自分の精神、霊、そして体でさえも健全、健康に保つことができせん。けれども、神の完全な愛は恐れをしめだします。自分を無くし、神が私を満たしてくださることによって、初めて自分に安定とバランスが与えられます。

2C 主が力

そしてここにあるように、「主は、私の力」となってくださいます。ですから、問題が次に起こる時に、私たちは主にその問題を解決していただくように、待ち望むことができます。私の能力ではなく、主がしてくださるのです。ここで大事なのは、「主が、私に力をくださる。」と書いていないことです。主が、私の力となってくださるということです。つまり、何か助けがほしいときだけ、私に力を下さいというものではありません。主ご自身に自分がすするとき、主ご自身に自分がつながるとき、その関係から力が流れ出るのです。そして、「私のほめ歌。」とあります。主が救いとなられたその関係の中にいると、私たちの心に主に対する歌が起こされるのです。

2A 救いの泉 3

1B 泉と貯水槽の違い

そして3節を見てください。「あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む。」とあります。救いを泉として喩えています。イエス様が、サマリヤの女のところに行かれたのを思い出してください。井戸から水を汲みに来た女に対して、イエス様は、「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。」と言われました。そして、「しかし、わたしが与える水を飲む者は、だれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。(ヨハネ 4:14)」なぜ渴くことがないのかと言いますと、泉だからです。イスラエルには、遺跡に数多くの貯水槽の遺跡があります。とても乾燥しているので、雨が降った時に水を溜めるのです。けれども、その水はいつか枯渇します。けれども、イスラエルには各地に泉があります。そこに行けば、もっともおいしい水が飲むことができ、もっとも私たちの体と魂を癒すのです。

数多くの方が、泉ではなく、貯水槽にある水を飲もうとします。すべての良きものは神から出て来ています。救いは神からのものです。そして神のもたらした祝福があります。それで、多くの方が泉ではなく、泉から流れ出て溜められているところに行こうとします。主ご自身の愛が源なのに、人の愛や人からの受け入れを求めます。主の義が源なのに、何とかして自分が正しいことを人に証明しようとして、自分がほっとできる環境を求めますが、平安はキリストご自身が源であり、この方のところに来なければ平安はないのです。ですから、私たちは絶えず泉に戻ります。泉

そのものにたどり着くことはできません。なぜなら、そこは勢いがあり、接近することはできないからです。けれども、近づくことによって初めてそこから溢れる強い流れに乗ることができます。イエス様は、「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。(ヨハネ 7:38)」主は本質的に、泉である方です。この方に近づくことによって、初めてその源から流れ出る御霊の中に留まることができます。

2B 救われた喜び

そして、私たちは絶えず、救われた喜びを抱いています。これは一過性のものではありません。かつて私は救われた喜びがあったと思ったが、いや、今は何か失われてしまったという方は、どこかでその源から離れてしまったのかもしれない。「私は、福音の真理についてはもう聞いているし、分かっている。」ではないのです。「聖書の学びはもう終えた。だから、もう私はこれについてはあまり力を入れていません、卒業です。」でもないのです。元々、何か別のものを求めて、主以外のものを求めていたために、そこに命が見いだされなくなったのかもしれない。どうか、初めの愛に戻ってください。イエス様が言われたように、どこで落ちたかを思い出し、悔い改め、初めの行ないに戻ってください。福音は、いつまでも変わりません。私は救いようのない罪人なのです。救いは神のみにあるのです。そしてこの方は救いの泉なるかたなのです。救いの偉大さ、そのすばらしさを私たちは、初めに信じて一年経ったら、それで完成、卒業ではないのです。そこでごくごく飲み続け、いつまで経っても、実に永遠にこの方の救いを喜び、ほめたたえるのです。